

ウィーンにて、および、ウィーンでヒルファディングを求めて

倉 田 稔

目次

ウィーンにて

N氏 ウィーンの、とあるレストランで

ウィーンでヒルファディングを求めて

ウィーンにて

N氏

ウィーンで、N氏という日本人と友人になった。Nさんは、大阪の音楽大学の学生で、フルート専攻だった。彼は学生時代に、オーストリアのオーケストラが来て、演奏に感激して楽屋へ行った。そのフルート奏者に「教わりたい」と申し出た。すると、「ではそこで吹いて見よ」と言われた。ちょうどフルートを持っていたので、吹いたら、「2年間面倒を見る」と言われた。その奏者はグラーツ音楽大学の先生だった。Nさんは、お金がないのですぐ行けず、1年間働いて金を貯め、すぐそのグラーツ音楽大学のその先生についた。さて、グラーツ大学の、ある女子学生がフルートの家庭教師を求めているので、Nさんは彼女を教えた。彼女はハイデルベルクの近くの出身で、その医学部に入ったが、親元を離れたかったので、グラーツ大学医学部に移って来たのだった。Nさんはグラーツ大学に1年いた。だが、その先生が、「ウィーンに出て外の水準を見た方がよい」というので、ウィーンのアカデミー、今のムジークホッフシューレへ転学した。その先生の先生についた。かのフルートの教え子・女子医大生もウィーン大学に転学した。Nさんは、アカデミーで1年過ごし、グラーツ大学の先生の保証期間が終わったので、生活に困った。ウィーンの四流——本人の表現なので、謙虚に言っているかもしれない——の⁽¹⁾オペラ・オーケストラでフルート奏者を求めているので、その試験を受けたら、採用された。そこで生活が始まった。

ある時、スイスで国際フルート・コンクールがあって、Nさんは聞きに行った。フランスのフルート学生たち3人がきわめてうまく、Nさんは他の国の人々には負けないが、この人たちにはとても勝てないと思った。楽屋へゆき、話した。「こんなにうまいのなら、ドイツ圏へゆけばどんなところでも採用してもらえる。」とNさんがいうと、彼らは、「フランスを離れたくない」と言う。「ではどうするのか」と聞くと、「親が葡萄酒作りだから跡をつぐ」と言う。他の2人も似たり寄ったりだった。「フルートで生活しないのか」と聞くと、「フランスはフルート人口が厚いからむずかしい」と、彼らは言った。Nさんは考え込んだ。世界の水準は高い。これでは大変だ。それにこの四流オーケストラではオペレッタばかりだ。ベートーベンなどやらない。考えた末、Nさんは、とうとうこのオーケストラをやめた。空いた席にまた日本人が採用された。職を失って、友人たちは、Nさんを「馬鹿だ」といった。それからNさんは、将来の職につくためにウィーン大学で化学を学んだ。その間、通訳、フルート吹きなどのアルバイトで生活した。学士卒業直前になった時、アフロ・アジア研究所⁽²⁾で奨学生を募集していた。それに応募し、月4,000シリング⁽³⁾を受けた。日本が後進国に入っていたから、1977年まで受けられた。こうして彼が勉強を

始めたのは26才であった。途中、かの彼女と結婚した。彼女は医者として勤めた。Nさんは、ウィーン大学で化学のマスターをとった。Nさんは、ドイツのマインツのマックス・プランク研究所に空きがあって採用された。それは不定期研究員だった。政府の研究計画にそえば3回(1回3年)まで研究室にいられるのだった。一方かの女は、マイツから50 km離れた医院に職を見つけた。40 kmの距離をNさんは研究所に通った。そして研究成果の一部で、ある大学のドクターをとった。Nさんはこの研究所に5年いて、あと1年研究員でいられたが、今の化学会社に就職できたので、やめた。やっと普通の生活ができるようになった。その後、思い切って古家を買った。妻は午前中だけの開業医をしている。「子供3人犬1匹の生活です」と。

- (1) ウィーンだけでも、たくさんオーケストラがある。ウィーン・フィル、国立オペラ・オーケストラ、フォルクス・オペラ・オーケストラ、トーン・キュンストラ・オーケストラ、放送管弦楽団など。それにまた、オーストリアの都会には、それぞれ市オーケストラがある。
- (2) 私もここに住んでいた。学生寮である。
- (3) 大体7万円くらいではないか。私はこの時、月6,000 シリング、2年目で7,000 シリングの奨学金を貰っていた。

ウィーンの、とあるレストランで

ウィーンで、私がよく行っていた中国・日本レストラン「K」があった。私が行ったのは、私のクラス・メイトで台湾人のユンがそこでウェイトレスとしてアルバイトをしていたからにすぎない。

そのレストラン「K」は、ちょっとした昼食に便利で、軽い中国料理と日本料理を出す。私はユンがいるだろうと思って通うのだが、彼女とは2回のうち1回しか、そこでは会えない。その女主人＝経営者は、中国人であり、時々店で会う。彼女は暇な時、私のいる席にきてお喋りをする。ある時その女主人は花を生けていた。「日本人に習った」と言う。「台湾の役人も日本に留学していた人が多い」と。女主人は「日本料理は簡単ですよ」と言う。よく中国の話をしてくれた。「三国志」などの話になると、我々と教養が似ているので面白い。

彼女には娘さんが2人おり、その長女と会ったことがある。可愛い、りこうそうな顔をしている。女主人は「子どもを英・米の大学を出した」と、漢字を書きながら説明した。彼女は片言の英語と日本語が喋れるのだ。「ウィーンは生活しやすい」と言う。店の次女と長くお喋りしたことがある、経済の話や姓の話である。「経済学を途中までやった。今、中断している。両親がいるから。しかし親とは別の道を歩む」と言う。

ドイツ語学校入口で、私は女主人とユンとに会ったことがある。月謝のことでユンは来たようだった。学校の前で2人が立ち止まっているのを見たので、ユンに声をかけた。「病気で4日間休んだ」と言う。それで2人に誘われて、ドロテウムを見、もう1軒アンティークを見た。ドロテウムは、ウィーンの骨董品の競売所である。女主人は、よくアンティークに来るようで、時々買うそうだ。何しろ経営者だから裕福である。

この店「K」で、朱君という新じゃん出身の男性がウェイターとしてアルバイトをしていた。北京で学び、今、ウィーン経済大で経済情報を学んでいる。

彼のお喋りは有益であった。「中国は何千年も皇帝制度だったから、人民の気持ちが変わるのがむづかしい。人民は強いものに従う。強い者は、意見が違ふと去らせる、または殺す。これはア

ジア人の特徴だ。」これは毛沢東にもあてはまることを、私は後に知る。彼は続けた。「中国の Kommunismusも本当の Kommunismusではない。皇帝制度だ。しかし10年後は変わるのではないか。若い人は比較的民主的になっている。ただし、地方・農民は無関心だが。」と語るのであった。

私はこの店で青島ビールを飲んだ。中国のビールでは最もおいしいと言うからである。青島は水がよいとされる。お酒では桂花酒がおいしいので、いつも頼んだ。日本食では、天どん、鰻すし、鮭すしを注文したこともあった。飲物ではマンゴー・ジュースなどである。

私が帰国するというので、女主人が私を招待するという事になった。それをユンが伝えてくれた。

歓送会は6時に始まった。さっそく、店のオーナーである夫人、ユンの、3人で夕食が始まった。ユンはウェイトレスなので、途中で席を離れた。また夫人は、ユンとは台湾では遠い知合いだそうで、大切にしなければ親に済まないという。そうだったら、もう少しアルバイト料を上げてやってもよさそうだ。大変安いのである。ユンは、1日300シリング余で、13時間働くと、初め言っていた。時給30シリング余だ、と。もうすぐ400シリングにしてもらおうと言っていた。しかし安い。チップ(Trinkgeld)は全部自分のものになる仕組みだ。1日800シリング稼いだ人もいと言う。そこで私も、クラス・メートとはいえ、おつりは彼女に渡したのであった。ユンは、木・土とレストランに勤める。ここにかわいいウェイトレスがいて、彼女は北京からきている。

夫人は嘆く。「我々の子どもたちが、アメリカ・ロンドン・ウィーンで教育を受けたことが、台湾では理解されない」と。

ここへ夫君も来た。他のウエイトレスたちも店に勤めにくる。夫妻の娘さんたちも加わって夕食となる。日本歴史のことなど、特に戦国時代が話題となった。夫君は日本語がうまい。しかし「ドイツ語はやっていない」という。夫人は夫君について説明する。「彼は大陸から台湾にきた。大家族制度であった。その父に妻・妾がいた。前妻の子がその妻に育てられ、妾にも子がいた。父は妾の所に住んでいた。彼は妻の子で末子です」。夫人の方は「簡単な家族の出」です、と。つまり大家族ではないという意味である。

夫君が言う。「我々は台湾から、アスパラガス、竹の子を、ウィーンに輸入している。それらをウィーンの中国レストランへ売っている。中国レストランはウィーンに400軒ある。日本レストランは10軒ある。我々は教育費がたいへんだった。」つまり彼らは商社を営んでいるのであって、夫人がこのレストランを営んでいる。「このレストランも宣伝しない、口コミです」。

「我々は北海道にも行った。果物は、タイやフィリピンが日本に輸出するようになった。だから台湾は少なくなった。それに台湾では工業が盛んで物価が高くなったので、輸出ができない。大陸は工賃が安いので日本に輸出している。日本向けのパイナップル缶も、生が増えたので少なくなった。台湾では北海道のアスパラガスより品質がよい。コンテナ輸送となったので助かる。何万箱とウィーンへ輸入している。」「台湾でも親戚に、なぜ国際的になるのかと言われるが、人々は分からない。我々は世界中を商売で飛び回った。」

私は「パイワン人とは何ですか」と聞くと、「台湾の高地原住民です」との答えであった。12時半になり、ウー・バーン[地下鉄]がなくなったので、私は腰を落ち着けることにした。こんどは私の話などをする。「娘もそろそろ結婚を考えねば」と夫妻は言う。

「どこも中国料理はその国に合わせている。アメリカのチャイナ・タウンやシンガポールでは、本式の中国料理が食べられる。」夫君は言う。「日本人は、学校で余り喋らない。先生に服従して。中国人は喋る。」

かつて私は留学した時、中国レストランで食後に梅酒は出なかった。だが今回では食後に無料で梅酒を出す。夫君は言う。最近「梅酒をウィーンで中国レストランで食後に出す。それでウィーン人はこれを求めるようになった。長屋＝チョウヤ（日本）が一番大きい会社です。」ここで、天ぷらが出た。夫人がいう。「銀座・新橋で、てんぷらをたべたら、海老が小さかった。」

私は、「中国人は家族主義的でしょ」と言うと、「そう、しかしそれには欠点がある。国家主義的でなくなる」と夫君が答える。文学の話をする夫人がする、「台湾では大きな文学がでない。それは日本でも同じです」。中国料理が出てきた。私の好きな桂火酒は、温めるのと冷やすのと2種類がある。いい香りである。「老酒には砂糖はいれない」のだと言う。マオタイ酒もここにはある。

夫人が言う、「子どもが跡を継がないかもしれない」と。欧米の大学を出て、好きなことをすれば、輸入商社を継ぐとはかぎらない。実際、娘さんは、継がないと言っていたのである。

夜も遅くなってきたので、帰ることにし、タクシーを呼んで貰った。来たのは日本車だった。多分2時ころ家についた。運転手は細かいおつりをもっていなかった。だからお釣りがもらえないで仕舞った。

私の『ウィーンの森の物語』（NHK ブックス）でも、このレストランが出ているが、それを読んだ知人が、ウィーンへ行った時、ここを訪れた。だが、閉まっていたと言う。私は8年後ウィーンを訪れたので、ここを見た。すると、やはり店は閉まっており、経営されていなかった。

ウィーンでヒルファディングを求めて

私は、オーストリアの経済学者・ドイツの政治家 ルードルフ・ヒルファディング（Rudolf Hilferding, 1877-1941）を研究した。

初め、アムステルダムで社会史国際研究所に1年半留学した。ここは、世界で最も資料が揃っていた。しかし、ボン・バート・ゴードスベルグのF. エーベルト研究所図書室にも行かねばならなかった。それ以外に、1ヶ月のヨーロッパ調査旅行をし、ウィーンの労働運動史研究所や、当時では大英博物館図書館、ロンドン大、ブレーメンの世界経済研究所などを調べた。当時東ドイツのフンボルト大学、同じくベルリンのML研、西ベルリンの自由大学も訪れた。それらによって調べを補った。アムステルダムでは豊富な資料に埋まれて、徹底的に文献調査をした。研究所の門番は、「貴方みたいに1年半もここに通った人は初めてですよ」と言っていた。未発表資料はコピーが許されていなかった時代だから、私はそれらは筆写したのである。筆写と言っても、その資料は印刷されていない手書きだから、字が読めるようになるだけでも2カ月はかかる。

アムステルダム留学の成果は、理論史的なものであって、日本の戦後ヒルファディング研究の水準をあげるものという書物⁽¹⁾を上梓した。

その留学の間、国際労働運動史研究会議に初めて参加した。その1人の参加者の紹介で、ヒルファディングの息子＝次男に面会した。私はウィーンで、氏に2回たっぷり、カフェでインタビューをした。それは、「ヒルファディング2世会見記」⁽²⁾に出ている。これをきっかけにして、私は、ヒルファディングのライフ・ヒストリーをも調べようと思った。早速、ウィーンのラート・ハウス（市庁舎）で、ヒルファディングとその妻の戸籍を調べたりした。だが私はアムステルダムに住んでいたため、長い時間をウィーンで使えなかった。

数年後、チャンスが来た。オーストリア文部省の留学生に選ばれて、2年弱、ウィーンに留学したからである。そこで私は本格的に、ヒルファディングの前半生のライフ・ヒストリーを調べた。

ヒルファディングの息子さんとも、また会えた。私はウィーン中を足で歩いた。ウィーン大学アルヒーフがあることを知った。ここでヒルファディングの学籍簿を見つけたので、通った。また彼の住んでいた所を全部回った。それらの知識は、アムステルダム留学で、彼の前半生の未発表手紙まで全部読んでいたからである。さて、彼が通ったと考えられる小学校へ行った。しかしここは資料がなかった。そこの教頭先生が、教育庁にあるかもしれないと指示するので、ウィーン市教育庁へ行ったら、「学校の資料は60年経ったら燃やす」というのであった。私の調査はこうして、からぶりとなった。かつては旧の、今度は新の、イスラエルティシェ・クルトウス・ゲマインデへ行って、彼の宗教関係を調べた。ヒルファディングはユダヤ人だからである。

それ以外にももちろん、ウィーン大学図書館は隔日に利用していたし、国立図書館=National Bibliothek へも行った。ここは本を申し込むと、翌日でないと出てこないし、パスポートがないと閲覧できない。

ラートハウスで、今度は戸籍係の主任とともに、本格的にヒルファディングの家系を調べた。ここは成果があった⁽³⁾。その後、Stadt und Landesarchiv (ラートハウス) へ行った。ヒルファディングの小学校の件を調べてくれると言われ、また隣のBibliothek へ行ったが、これは駄目だった。ウィーン第2区郷土博物館資料室にも行って、第2区について学んだ。ヒルファディングは初め第2区に住んでいたからである。

有名な音楽家などが埋葬されていて、今は観光地でもあるウィーン中央墓地へも行った。ただし、人が普通行かないユダヤ人墓地の部を訪ねたのである。そして私は彼の親戚の行方を追った。埋葬記録を調べたのである。ヒルファディング自体の資料は、彼がユダヤ教を離れたので、ここにはない。また再びウィーンの労働運動史研へも通った。ここはヒルファディングについてはアムステルダムのようにはたくさんない。しかしオットー・パウアーについては宝庫だった。オーストリア社会民主党本部図書館ではうまく行かなかった。資料があまりないとのことだった。

ウィーン大学名誉教授のエドゥアルト・メルツ先生⁽⁴⁾は、私がゼミナールにも講義⁽⁵⁾にも出させて頂いた人であり、ヒルファディングについても詳しい人だが——『金融資本論』ウィーン版序文を書いている——、それでも博士は細かくは知らないで、私は自分の力だけが頼りだった。そういえばアムステルダム留学時代に、私は研究所の所員にヒルファディングについて教えて下さいと言ったら、君の方がよく知っているはずだと言われて、愕然としたことがある。ウィーンでは、ここに資料がありそうだという所を、きゅう覚を頼るようにして調べ回った。全く成果がないことも、上記のように随分やった。

この留学で、ヒルファディングを知るにはハプスブルク歴史を学ばないと駄目だと考えて、ハプスブルク史の勉強もした。また私はドイツ語が下手だということも分かり、留学期間中はドイツ語の訓練にほとんど費やした。その合間をぬって調査をしたので、多分私の調べもささやかなものである。

このようなことで、ヒルファディングの世界で最も詳しい前半生の伝記⁽⁶⁾を書いた。同時に彼の名作集も、息子さん(ペーター・ミルフォード)の許可を得て編纂⁽⁷⁾した。こうして初めの著書は頭で書いたのが、次の著書は足で書いた。

さて、どこを調査しようかというのは、研究・日常・遊びの生活の中で、ウィーンで生活している中で、思い付くものである。もちろん色々な人からヒントを貰ったり、調査の網を広げて行くのではあるが。

その調査も悲喜こもごもである。成果があがらない調査は論文にも本にも入れられない。しか

しすべての調査が成功するわけではない。したがって本の中の記述の裏には、沢山の不成功な調査が積み重なっていて、埋め草、捨石になっているわけである。

危なかったという例は次ぎである。ヒルファディングが通ったギムナジウム（古典中学）を訪れ、私はその校長先生と面会した。先生は昔だから資料はもうないはずですよと言って、私は断わられた。残念だった。しかし私は、しばし立ち去りがたく、雑談を始めた。短い雑談が終って、また話題がヒルファディングに戻った。そこで校長先生が、やはりちょっと確かめてみようと思ひ直し、校長室の資料戸棚を調べたら、何と幸運にもヒルファディングの学業成績簿が発見されたのである。「ありません」といわれて、私がそのまま帰ったら、永久に見つからなかったものである。

ギムナジウムを調べようと思ったのも、思い付きである。それを思い付いてから、ある資料室で、当時のウィーン第2区のギムナジウムが何でどこにあるかを調べた。それに従って実際に行ってみると、学校の対応が変であった。よく聞いて見ると、そこは昔は女子のギムナジウムだったのである。近くにあるもう一つの学校が男子ギムナジウムだったのであった。私は間違ったのである。「その人は女子生徒ではないんでしょ」と言われ、笑われてしまった。

学校を訪問するのも時間が問題だ。小学校では、午前中、先生は授業であろう。1時には帰宅するであろう。だから12時ちょっと前に行っておもて願ひだけして、この昼休みに面談する必要がある。

官庁の職員と面談するとすれば、職員は12時には帰り始めるから、9時か10時ころに会って用件の申し入れをする必要がある。お役人に協力してもらうにはしっかり言う必要がある。自分はいったんとした研究者なのだ、はるばる日本からやってきたのだ、と宣伝的に言うておく。

再び新しい10カ月のウィーン留学で、私が抵抗文書館（Dokumentationsarchiv des Widerstandes）に通った時、研究テーマはヒルファディングではなかったが、私は偶然ヒルファディングの後期の主著を発見した。私は、我と我が目を疑った。あまり嬉しいので、私の本＝後期名作集の中に入れて出版した⁽¹⁾。しかし、初めのウィーン留学ですでにこの研究所を訪れているのに、なぜ見過ごしたのだろうかと思ひである。

つまらないことを2つ書こう。

その時期、私のドイツ語の先生は、私との会話でこんなことを言った。私の出した「本は、人は買うのか」と彼女は云い、私が「ほとんどすぐ、2,000部が全部売り切れた」というと、彼女は、「オーストリアでは日本の経済学者の本を出しても1冊も売れませんよ。日本人は世界に大いに感心を持っていて、大したもんです」と語った。

他のドイツ語の先生のクラスで、私はVortragをした。一つは、ヒルファディングの話である。この先生はヒルファディングを知らなかった。それで私は皮肉を言った。「日本人の私がこのオーストリアの経済学者を知っていて、オーストリア人の貴方が知らないなんて」と。彼女はこう答えた。「だからこんなに小さくなっているの」と。

実際は彼女に罪はない。ヒルファディングはウィーンであまり知られていない。ドイツ時代に有名になったからである。だから、社会科学を学ぶ大学生以上でないと彼を知らないだろう。ただしヒルファディングは、ワイマール時代のドイツ社会民主党の、政治指導の上ではないが、最高の政治理論的・社会科学上の指導者であった。これは私のささやかな調べでさえ、よく分かる。

(1) 『金融資本論の成立』青木書店。；『金融資本論の成立』補遺（『人文研究』51）

ウィーンにて、および、ウィーンでヒルファディングを求めて

- (2) 『現代史研究』28, 1976年5月。
- (3) 「『若きヒルファディング』補遺」(『商学討究』42・4)
- (4) Eduard März, 1908-1987。訳書『シュムペーターのウィーン』日本経済評論社, がある。
- (5) ドクター既取得者のための講義で, 「オーストリア経済史」。
- (6) 『若きヒルファディング』丘書房。; 黒滝正昭「書評 倉田 稔著『若きヒルファディング』」(『商学討究』36・1)。
- (7) 『ヒルファディング 現代資本主義論』新評論。
- (8) 『ヒルファディング ナチス経済の構造分析』新評論。